VITALITE
生命力について

神社本庁総長
白井　永二
愛知県出身。大正４年生まれ。国学院大学卒。鎌倉鶴岡八幡宮宮司。

●聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿　代表取締役社長

佐多：かねてより先生から、日本の神道は宗教ではなく文化だ、というお話を伺っておりますが。

白井：はい。神社は宗教法人ですが、神道は区別して私はそう申しています。日本では戦前は仏教が宗教の主流でしたから、宗旨という言葉が使われていました。お宅の宗旨は何ですかと聞きますと、禅宗だとか、浄土宗というふうに答えたわけです。神道は神式、仏式と区別する位でした。お正月には、神社に8000万人余りがお詣りされるでしょう。井戸の神様から、竈（かまど）の神、厠（かわや）の神にも、お正月の注連縄飾りをして、八百万（やおよろず）の神様をお祀りします。

自動車や工作機械にも正月のお飾りをつけるのは、神様をお迎えしてお祀りする新しい型でしょう。それぞれの神様が私どもの傍にいて、いつもお守り下さるのです。

それが、「一神教」の人々には、いわゆる「宗教」がないように見えるようです。日本人が外来の宗教である仏教を受け入れながらも神道を持ち続けたのは、上代の人が「仏の教」と「神の道」との違いを認識し、固有の神道と区分したことによるのだと思います。神道は「神の道」、即ち神の行った通りに人も行うという考え方でしょう。「教」を中心にしたのが仏教であり、宗教だということです。

日本の仏教学者に、宗教の宗は「もと」であるという、悟りの根源を説かれる方があります。日本人の一番の「もと」は神様なのか自分なのか、そのどちらでもあろうと私は考えます。

日本人としては、道を誤らずに自己をみつめつつ生きているということ、「心」の問題でしょうね。神様に見透してもらう姿勢です。それが「もと」ですね。例えれば扇の要（かなめ）のようなものです。扇に何が描いてあってもいいが、要（かなめ）がバラバラになったら用をなしませんし、機能しません。こわれものです。この要（かなめ）が、先祖以来「親の背」を見て育った自分の心であり「もと」なんだと思います。

佐多：神道は善悪の判断をしないで「場」を設定していると言いますか、何となく奇妙な感じもしますが、何か、たいへん意義深い時間と空間の「場」を与えているような気がしますね。ただ、人にはバイブルのようなものが必要なのではないでしょうか。

白井：神道にはバイブルはないですね。ただ、先祖代々の歴史伝統を継いで生きて来たことが神の道であり、生きる場といえるのでしょうか。ある意味では自己の赴くままで、融通無碍というか、一即多、多即一だが、統一性はある、箍（たが）はあるんだと思います。

佐多：神道の考えでは人間が死ぬ時は息が止まる時だとされていますね。ところが、医療の世界では、今、人工呼吸器を使いますと、本来なら息のできない身体でも呼吸が続くんです。脳が死んでいてもですね。そこに脳死や臓器移植という非常に難しい問題が出て来ました。

白井：日本には古くから、殯（もがり）という習慣があります。一定期間死体を安置して、遊離した魂が死者の身体に再び還ってくることを願ったのです。今では短期間の通夜の後火葬にしてしまいますが、昔の本を見ると、二年も殯（もがり）を続けた例もあります。家族は復活を祈りながらも、一方でその間に、山つくりという、お墓の準備をするのです。また、魂呼ばい（たまよばひ）というのは、死ぬ間際に家族皆でその人の名前を呼ぶ習慣です。棟に穴をあけたり、屋根などに上ったりして名前を呼ぶ地方もありました。昔は生き返って来るということがあったんでしょうね。

VITALITE
インタビュー

なきがら（死体）は魂（たましい）の入れ物として、傷つけないように大切にしました。脳死を表す言葉は、もともとの日本語にはありませんが、神社界でも研究会などをやっています。原則は、その生死を分かつという伝統的な考えだと思いますよ。

佐多：臨死体験も、最近は医学的に研究されているようです。

白井：実は、私も一昨年手術を受けた時、「麻酔からさめる時には名を呼びますから」と言われて、そんな経験が出来るかと思ったんですよ。トンネルの向こうに見えるきれいなお花畑に行こうとしたら、後ろから名を呼ばれたので帰って来たというような話です。不思議にも、時代や地域を問わず、ほぼ共通しているんですね。いい話ですし、よい機会だと思いましたが、だめでした。

佐多：神道では、生命力の根源のことを「むすひ」と言われるそうですが、これはどういう意味なのですか。

白井：そうですね。産霊（むすひ）という字をあてています。息子（むすこ）とか、御飯を蒸してお餅にする、苔がむすなど、「むす」とは、生まれる、ものが成熟していく、というような意味あいです。生命の霊力を「ひ」といい、合成して産霊（むすひ）というのです。

日本の神話では、神様さえ柿の実のように「なり」ましたと記されています。具体的には「葦牙（あしかび）のごと萌えあがる物」といいまして、水と土と太陽と一体となる泥の中から力強く生命が芽ぶく状態を見て神の誕生を連想しています。神様が生まれ、次いで神が神々を生み、島や木など万物を生み、最後に神を祀る神（人）を生みます。

旧約聖書の創世物語では、神様が土を自分の姿に似せて型どり、息を吹きかけて人を創ります。この創り出すという思想は、ハイテクによって、生命の創造や改変を科学する現代にも生きているのではないでしょうか。

しかしこれは、日本では生まれない思考でしょう。「ち」は争えぬとか、この子は祖父母にそっくりだとか、生まれ変って今生きているという感情が、日本人の底にある考えでしょうね。ロマンがありますね。民族の「ち」を信じられますから。

このような普遍的な生命力を産み出すのが神様の力（ちから）でこの根源を古人は産霊（むすひ）と言ったと考えていいでしょうね。

佐多：先生はよく、「御霊（みたま）の幸（さち）を垂（た）れ給（たま）え」と唱えて「祈る」と話されていますね。

白井：共通の祈りの言葉をもつ宗教もありますが、神道では何と祈ったらいいですかと聞かれることがあります。その時私が私なりに口ずさむ詞はこうですと申します。お詣りする時に手を合せて、真向っている神様の霊力（お力）を頂きたい、と願う意味です。

幸の「さ」は、古い言葉ですが、皐月（さつき）、早苗（さなえ）、早下り（さおり）、早上り（さなぶり）など、若草の萌えあがる季節に使われる、豊かなものを表わす言葉のようです。理解を超えた古い言葉ですが、今も生きています。

幸（さち）と言いますのは、幸福（さいわい）と同類の語でもありますが、現世利益的なものばかりではありません。海幸、山幸の神話にもある大切な言葉です。昔の人は神祭りを行って、収穫を捧げて自然の恵みを感謝しました。今は人工的な「生産」に馴らされています。こうしたハイテクが人間にまで及んでいるのが現代ですね。でも、季節に熟したもの、海川山野の幸（さち）のおいしさは格別です。しあわせを感じます。

私は、人間の尊厳とか生きる意味、権利などが人類全体の今日的命題であることを疑いません。これを決するのは主体でしょうか。相対的に考えるものでしょうか。

人間が動植物と決定的に異なる点は、人間には自己の自覚があることではないでしょうか。「御霊（みたま）の幸（さち）を垂（た）れ給（たま）え」とは、利己だけを考えない“自己の発見”、神道的に言えば、その家の“中今”に生まれて家を継ぎ、後に伝える「ち」のつながりを重視して生きる、そんな心をこめた日本人の祈りと申したらよいでしょうか。

NEW TECHNOLOGY

第1回日本心血管インターベンション学会

小倉記念病院循環器科主任部長
延吉　正清

1940年生まれ。京都大学医学部卒業。高知市民病院内科、岐阜大学第2内科等を経て、74年より小倉記念病院循環器科、主任部長として現在に至る。京都大学医学部、島根医科大学、浜松医科大学非常勤講師。藤田学園名古屋保健衛生大学客員教授。

来る6月4日から6日までの3日間、北九州市において、第1回日本心血管インターベンション学会が開催される。これは、ＰＴＣＡを中心とした、カテーテルによる心血管疾患の治療術に関する学術研究を目的としたものだ。そこで、会長をつとめられる小倉記念病院の延吉正清先生に、学会の趣旨をはじめ、ＰＴＣＡや新技術の現状、将来の見通しなどについて、話を伺った。

急速に普及したPTCA

「心血管疾患の多い欧米では、冠状動脈狭窄の治療術として、バイパス手術が以前より盛んに行なわれてきましたが、1977年にＰＴＣＡが登場してから、開胸せずにカテーテルを用いて血管を開く方法が次第に普及しました。欧米よりも心血管疾患の少なかったわが国においては、バイパス手術の普及はやや遅れていたのですが、その過程でＰＴＣＡが紹介されたことにより欧米よりも急速に、ＰＴＣＡが普及したのです。現在わが国では、バイパス手術が年間約6000例であるのに対し、ＰＴＣＡは約3万例行なわれており、冠状動脈狭窄に対する治療法としては、ＰＴＣＡが最も一般的な方法となっています。」

小倉記念病院では、延吉先生を中心に、1981年からＰＴＣＡを数多く手がけており、現在では、年間約1700例をこなしている。

実質的で、国際的にも開かれた学会に

学会の前身は、延吉先生らが中心となってつくった「心血管形成術研究会」で、すでに7年間、ＰＴＣＡに関する研究会を重ねてきた。

「今回は、会員が2000人を超えたこと、様々な新技術が開発されつつあることなどの事情にかんがみ、対象も、より広い範囲の『心血管インターベンション』として、正式な学会とすることにしました。研究会時代は、年に3回、1日だけの短時間のものだったのですが、学会にすることにより、3日間にわたる充実した学術論議が行えると思います。」

運営は、「学術本位の実質的な学会」が基本方針で、第1日目には、小倉記念病院のライブデモンストレーション、2日目と3日目には特別講演と研究発表を予定している。また、研究会の時代から好評だったシネカンファレンスも

計画されている。

この学会のもうひとつの特徴は、公用語を、日本語と英語の2カ国語にしていることだ。

「学会では、日本語と英語の同時通訳をつける予定です。ですから、特別講演などは、英語が苦手でもイヤホーンで聞けますし、海外から参加した人も、日本語の発表を英語で聞くことができます。案内状も、日本だけでなく、韓国、台湾、香港、シンガポール、タイ、インドネシアなどにも出しました。」

将来的には、「アジア太平洋地域のインターベンション学会にしたい」というのが、延吉先生らの目標である。

注目される新技術

学会のトピックスとして注目されているのが、いくつかの新技術の動向である。

ＰＴＣＡの長所は、外科的な開胸手術と比較して侵襲が少ない、入院日数が少ない、安全性が高いことなどがあげられるが、①完全閉塞の症例に対する成功率が50～70％程度と低いこと（通常は90％程度）、②一度開いた血管が急激に再狭窄するアブラクトクロージャー、③満足な結果が得られないサブオプティマルＰＴＣＡ、④再狭窄が30～40％の確率で起こる、などの点が課題とされている。

これらの問題を解決するため、ステント（Coronary stent）、アテレクトミー（Coronary atherectomy）、レーザー（Laser angioplasty）などの新技術が次々に開発され、各地で治験中であるが、学会では、特別講演やパネルディスカッションなどでこれらを大きくとりあげる予定である。

「現在、この分野で最もホットな話題は、『ステント』でしょう。これは、簡単にいうと、バルーンの上に網（ステント）がのっていて、バルーンを膨らませると、それが広がって血管内に残るという、いわば、トンネルの補強工事のようなものです。ステントの長所は、特にアブラクトクロージャーに対してよい結果が得られることで、ステントの導入によって、緊急のバイパス手術は、相当少なくてすむようになるのではないかと期待されています。」

ほかにも、アテレクトミーという、カテーテルの先端についたカッターのようなもので病変部を削り取りながら、回収していく技術、さらにはエキシマレーザーやヤグレーザーによって病変部を蒸発させてしまう方法など、いくつかの新しい話題について、活発な議論が予定されている。

将来は専門医制度も

これらの新技術は、ＰＴＣＡの現在の課題を解決するものとして期待されているが、それぞれ特徴があり、症例にあわせて、最も適した方法が臨床で使用されなければならない。

「現在、この分野には、多くの若い人が興味をもってくれています。以前は、内科医では治すことができなかったものが治せるようになったわけですから、大きな希望なのです。しかし、今申し上げたような新しい技術を自分で行なえるようになるには、最低でもＰＴＣＡの症例を300例程度はこなしてからでないと、危険だと思います。新技術を臨床に応用するには、どのような症例にどの技術を適用するかということも、適切に判断できなければなりません。術者の技量が大きくものをいうのです。ですから、学会での講演や発表、デモンストレーションなどを通して、多くの人達に、知識や技術の向上をはかってもらいたいのです。将来的には、学会が中心となって専門医制度のようなものをつくりたいと思っています。」

「心血管インターベンション」は、これからも、さらに発展する可能性の大きな分野である。それだけに、学会に寄せられる期待も大きく、会の成功が望まれている。

第１回心血管インターベンション学会

会期：1992年6月4日（木）～6日（土）
会場：北九州国際会議場／九州厚生年金会館
会長：延吉正清
小倉記念病院循環器科主任部長

●特別講演（タイトルは仮題）：

Martin B.　Leon
Washington Cardiology Center
「State of the Art；New Interventional Cardiology」

Maurice Buchbinder
University of California San Diego Medical Center
「Coronary Rotational Ablation（Rotablator）」

Stephan Ellis
Cleveland Clinic
「Interventional Therapy in AMI」

問い合わせ先:

日本心血管インターベンション学会事務局
〒802　北九州市小倉北区貴船町1－1
小倉記念病院心臓病センター内
TEL:093－921－2231　内561
FAX:093－922－5624

NEW
TECHNOLOGY

手の外科における新しい技術

名古屋大学医学部附属病院分院整形外科助教授
整形外科部長
中村　蓼吾（りょうご）

1941年生まれ。名古屋大学卒業。大学院在籍中より手の外科に進む。名古屋大学医学院附属病院分院助手、講師等を経て、1986年より現職。

「手の外科」はいつ頃から発達してきたのですか。

中村：手は、人間の文明とか文化をつくったもとになっているわけで、人間らしく生活するのに重要な器官です。実際に、脳の運動野において手の占める面積は、ものすごく大きく、特に両手が不自由になると日常の生活活動や文化活動への影響が非常に大きいのです。

手の外科に興味をもつ医師は、20世紀初頭から、何人かいたのですが、第二次世界大戦中に、アメリカのSterling Bunnell先生が、戦争で手を怪我した人の機能障害が、みかけよりもひどいということに気付き手の外科を専門に扱うチームを組織しました。その結果を“Surgery of the Hand”という本にまとめられ、手の外科という学問が確立したのです。Bunnell先生は、そのことから、「手の外科の父」と呼ばれています。

手の外科ではどんな手術が多いのですか。

中村：手には、神経も血管も、ありとあらゆる組織があり、いろいろな怪我や病気があります。手の外科のカバーする範囲は、厳密には、手関節よりも末梢の骨折、脱臼などの怪我、腱・神経の外傷、先天異常などの各種疾患の治療です。しかし、手の外科の医師は神経を扱うのが比較的得意なので、肘関節や、腕神経損傷という首の根元での神経損揚や、あるいは足の神経の怪我や疾患まで扱うことも多いです。

最近発達した注目すべき技術にはどんなものがありますか。

中村：一つは指の再接着ですね。落ちた指をつなぐというのは、一つの夢だったのですが、1ミリ前後の血管をどうやってつなぐかという問題があったのです。肉眼で試みられた時代もありましたが、うまくいかない。そこで、血管縫合に顕微鏡が導入され、1965年に奈良医大の玉井先生（現整形外科教授）が、親指の完全切断をつながれたんです。これが世界で最初の指の完全切断再接着例とされています。

指の再接着は70年代に一般化しましたが、その技術の応用で、複合組織移植という方法が行われるようになりました。今最もよく行われているのは、手の親指を切断した人に骨盤の骨をつなぎ、そこに足の親指の爪や皮膚を巻き付けるという方法です。足の方の親指は骨を残して、皮膚を別のところから移植するのです。複合というのは、皮膚だけでなく、神経や血管など、色々なものを一緒に行うという意味ですが、英語では、wrap around flapと呼んでいます。これが発表されたのは1980年です。

親指というのは、手の機能の半分を占めるというぐらい大事なものですから、親指のない人に親指をつくるというのも、手の外科の重要な役割の一つです。もうちょっと簡単な方法では、足の指を親指に移すという方法もありますし、今も様々な新しい方法が試みられています。

手の外科の進歩には、顕微鏡が大きな役割を果たしたようですが、指以外の手術では顕微鏡によりどんな進歩がみられたのでしょう。

中村：腕神経損傷というのは、手の外科というよりも神経の外科なんですが、実際には手の外科で扱っています。これは脊髄から腕に行く神経が腕への出口で損傷するというものです。原因は、分娩麻痺やオートバイ事故などです。そのうちかなりのものが、引き抜き損傷といいまして、頸髄の根元から神経が引き抜かれた状態になってしまうのです。そこをつないでも機能は回復しないので、神経の移行術が行われるようになりました。顕微鏡を用いた手術で、肋間神経の何本かを移植することで、肘が曲がるようになったのです。これは、東大の津山直一先生（現名誉教授）が中心に行われました。このようなめざましい進歩は、顕微鏡を用いた手術が発達したことによってもたらされたのです。

また、手の指の付け根の上下2センチぐらいの範囲は、従来no man's landと呼ばれ、屈筋腱が切れても誰も手が出せないとされていました。その範囲で指の屈筋腱が切れた場合は、縫っても動くようにならなかったのです。それに対して、Bunnell先生が、別のところから腱をもってきてつなげるという、遊離腱移植術を始められ、一つの進歩がみられたのです。ところが70年代になって、顕微鏡の技術が進み、アメリカのKleinertという人が、顕微鏡下手術の手技を応用して丁寧に縫うことで、再び動くようになることがわかりました。そして、この場所は、some man's landと呼ばれるようになったのです。この意味は、誰がやってもよいというわけではなく、細かい組織を丁寧に扱って上手に縫えば動くということです。この方法で、今では遊離腱移植術よりも良い結果が出ています。そのあたりに手の外科の職人的なところがあるのですね。

手の外科では、他にも新しい器具が次々に開発されているようですが、それらを利用したもので、最近話題になっている治療法としては、どんなものがあるでしょう。

中村：若い人に多い骨折で、手首の舟状骨骨折があります。スポーツやオートバイによる事故で起こりますが、スポーツ活動が活発になるのにしたがって怪我も増加しています。ちょうど、親指の根元あたりにある骨ですが、診断が難しく、レントゲン撮影では写らない場合が多いのです。かなり時間がたってから痛むということで、よく調べたら折れていたと。おまけにこの骨折の悪いところは、なかなかつきにくいのです。診断も治療も困難なのです。

しかし治療面では、オーストラリアのHerbertという人が、ハーバートスクリューという新しいスクリューを発表し、治療成績はかなり向上しました。ハーバートスクリューは、ネジのピッチが根元と先端で違っていて、それを折れた所にねじ込んでいくと、ピッチの違いにより、自動的に骨が寄って来るのです。

もう一つ、手首の骨折でよく話題になるのが、撓骨の遠位端骨折です。若い人では、舟状骨骨折がよく起きるのに対し、これは、老人がころんで手をついた拍子によく起こります。撓骨は、人体の中では鎖骨に次いでよく折れる部位です。この骨折は骨癒合はよいのですが、なかなか元通りの形に戻らず、変型治癒が多いのです。70年代までは、変型治癒は症状にはあまり関係ないとされていましたが、70年代後半から80年代にかけて治療成績が色々検討され、形が悪いものは、やはり治療成績も悪いということがはっきりしてきたのです。

その治療として、よく用いられるようになったものが創外固定器を使う方法です。これは、手首にいくつかピンを差し込んで、創外固定器を取り付け、骨折部分を正しい方向に固定して治療しようというもので、ギブスをただ取り付ける従来の方法よりも、ずっと変形治癒を少なくすることが可能となりました。もう一つは、積極的に手術をして骨を揃える方法で、現在は、その二つの方法がよく用いられています。

先生が最も興味をもって取り組んでおられるのは。

中村：私自身は、Kienböck病（月状骨軟化症）に対して「撓骨短縮術」という方法を取り入れて、症例を積み重ね、それなりの成果を得てきました。

現在の一つの目標は、手関節の外傷疾患の診断学を確立し、体系化するということです。その中でも力を入れてやってきたのは、手関節のCTによる立体像です。これは、CTで撮影した写真をコンピュータ処理によって、立体化する試みです。すると、折れた骨がどのようにずれているか、異常の程度を知るのに有効なのです。MRIでも同じようなことができます。一般的にCTでは骨が、MRIでは神経や血管などの軟部組織がよく出せます。これを応用して、手術のシミュレーションができるようにしたいと思っています。

手の外科の面白い点、またこれからの可能性は。

中村：手というのは、小さいところに細かな構造が沢山あって、その一つ一つが機能と関係が深いのです。手の外科では、手術の一例ごとに、それぞれ別の工夫が必要です。手術で良い結果を出すには、顕微鏡を用いるなど、ミリ単位の高精度の手術をする必要があります。また、手術の結果が、即、機能として現れるので、判定が明快です。つまり、そういう高精度の手術が要求される面と、機能に直結した治療分野だということが言えると思います。現在は、顕微鏡で0.3ミリ程度の血管の縫合を行っていますが、将来は超マイクロサージェリーといって、0.1ミリ単位の血管の縫合まで手術の精度を高められる可能性があります。それに関連して、マジックハンドといわれる手術用ロボットなどの研究も行われています。

また、手の外科で扱う症例は、社会の流れと切り離すことができません。スポーツ活動が盛んになると、それに伴う障害も起きますし、今後、疾患や外傷も、ますます多様化してくると予測されます。それらの一つ一つに対応できるよう、診断、治療の技術を向上させたいと思います。

LOVE

がんばれ！
難病とたたかう子供たち支援運動。

財団法人 日本児童家庭文化協会
事務局長
小林　信秋
1947年生まれ。コンピュータ会社勤務を経て、1988年より現職。

こどもの難病電話相談室

1965年に設立された財団法人 日本児童家庭文化協会は、児童家庭の健全育成事業、児童家庭及び社会福祉施設への援助、難病とたたかう子供たちとその家族への支援、募金活動のほか、児童家庭に関する調査研究など、様々な活動を行なっている。そのなかで、最近、力を入れているのが、難病とたたかう子供たちとその家族への支援活動である。

事務局長の小林信秋氏に、話を伺った。

「原因や治療法が不明の難病に苦しんでいる子供たちは、わが国で約20万人、病気の種類も、500種類以上あるといわれています。それらの難病で苦しんでいる子供たちのクオリティーオブライフを向上させるためにどうすればよいかを、私たちはもっと考え、活動していきたいのです。」

こどもの難病電話相談室

難病の子供たちとその家族への支援活動のひとつが、1988年8月から始められた「こどもの難病電話相談室」だ。

これは、月曜日から金曜日まで、毎日午前11時から午後3時までの間、オープンし、保健婦、看護婦、ケースワーカーなどのボランティア4名が交代で担当している。

ボランティアのひとりである山中美知子さんは、以前、ケースワーカーとして病院で勤務していた。その経験を生かして、相談室開設当時から、もう4年間、毎週2回、多くの人達の電話相談にのっている。

電話は全国からかかってくるが、その内容は、診断や治療に関すること、医師とのコミュニケーションなど、医療に関するものが多く、他に患者の会に関する問い合わせ、教育、医療費、家族問題など、広い分野にわたっている。

「ケースワーカーとして病院で働いていた時は、患者さんや家族の方と実際会って相談にのっていました。ここに電話をかけてこられるのは、ほとんどが患者さんのお母さんです。電話の場合、相手の方の表情がわかりませんので、相手が何を言いたいのかを判断するために、特に話しやすい雰囲気をつくって、よく聞くように気を付けています。本当に言いたいことは別にあるのに、言い出せないでいることがよくあるのです。何回も継続してかけて来る方も結構多いのですが、事態が望ましい方向に進んだときや、話しているうちに、声が明るくなったり、信頼してもらったかな、と感じたときは、とても嬉しいです。病気の子供たちの心の支えとまではいかなくても、何らかの方向性をみつけたり、気待ちが穏やかになる助けになればよいと思います。」

最近は、一般の患者さんの家族だけでなく、ソーシャルワーカーや病院関係者からの相談も増えている。相談員のバックグラウンドが様々であることも、それぞれが別の視点から相談に対処でき、良い結果を生んでいるようだ。

山中さんは、「電話相談は、まだまだPR不足を感じます。実際に問題を抱えながら、どこに相談したらよいかわからずに困っているような人達にもっと知ってもらって、役に立つようなものにしていきたいのです。」と、語っている。

サマーキャンプを予定している富士山麓の村

「がんばれ共和国」

小林さんが現在最も楽しみにして準備しているのは、8月に実施されるサマーキャンプ、「がんばれ共和国」の建国である。

富士山麓にある静岡県の教育施設「富士山麓の村」に全国から難病の子供達や両親、ボランティアなど約500人が集まり、「がんばれ共和国」の建国を宣言する計画だ。

「最大の目的は、外に出ていって、友だちをいっぱいつくろう、ということです。仲間がいっぱいいたほうが、生きていて楽しいじゃないですか。難病の子供たちは、なかなか外に出て友だちをつくる機会がもちにくいので、そういう子供たちにぜひ参加してもらいたいと思います。」

サマーキャンプは、小林さんが以前から夢みていた構想だったのだが、その話を聞いて、趣旨に賛同した富士宮市が、市制50周年の記念事業の一つとして、全面的に協力してくれることになり、さらに、大勢の地元の人達も参加して、実現できることとなった。地元の人達を中心に、7月にはサマーキャンプのためのチャリティーコンサートも予定されている。

「がんばれ共和国」を主催するのは、日本児童家庭文化協会とSSPE青空の会、全国膠原病友の会などをはじめとする患者の親の会である。そして、富士宮市のほか、動物農場、童画芸術協会など、多くの団体が協力する。

また、参加する子供たちの病気の種類も様々であるため、このキャンプでは、財団の企画運営委員の医師や患者の会の顧問の医師など約10人が付き添うだけでなく、不測の事態に備えて、富士宮市医師会や、富士宮市立病院が全面的にバックアップすることになっている。

「がんばれ共和国」に先立ち、5月9日には富士宮市で第8回こどもの難病シンポジウム（会長：長畑正道静岡こども病院院長、13:00～17:00、会場：富士宮市役所）が、開催されるが、そのテーマは、「医療も、こども最優先」である。

「このテーマは、静岡こども病院の長畑先生が考えたものです。趣旨は、ユニセフの92年の「子供白書」でも、子供最優先とうたわれているように、医療を、医療側の都合で行なうのではなく、子供の都合をつねに最優先しよう、というものです。スピーカーとしては、厚生省の関係者のほか、こども病院の医師、親御さんなどを予定しています。」

小林さんの夢のひとつは、難病の子供たちを対象にした、常設のキャンプ施設をつくることである。「今年のサマーキャンプは、それに向けた第一歩にしたいのです。」

日本児童家庭文化協会では、子供たちのクオリティーオブライフのことを、「いのちの輝き」と訳して、使用している。この「がんばれ共和国」の建国が、沢山の難病の子供たちにとって、「いのちの輝き」を増すことができるような、楽しい出来事となってほしいものである。

サマーキャンプ「がんばれ共和国」

期　　日：1992年8月22日（土）～24日（月）
場　　所：静岡県立「富士山麓の村」
　　静岡県富士宮市粟倉富士山
参加人員：500名
　　（すでに400名の参加が決まっている）
募集人員：100名
参加資格：難病や障害を持つ子供と家族　70名
　　ボランティア（一般）　30名
＊定員になり次第、締め切ります。
参 加 費：（大人も子供も同額）
　　新宿集合（バス利用）・・・・1人=18,000円
　　現地集合　1人= 8,000円
＊参加費には「動物遊び」、旅行障害保険が含まれます。

問い合わせ先：
日本児童家庭文化協会がんばれ共和国係
〒102 東京都千代田区五番町2 番町パレスビル
電話：03－3261－3696

こどもの難病電話相談室

（月～金　11:00～15:00）　電話：03－3222－5588

FAITH

渡辺　政直

元日本聖公会首座司教。1986年に退職後、「再度、現場の第一歩に戻り、人々への奉仕活動の道を歩みたい」という希望のもと、1987年7月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において、貧しい人達や、同港にある「THE MISSION TO SEAMEN」という船員のための休養施設で奉仕活動を行なう傍ら、タンザニア各地の英国教会（THE ANGLICAN CHURCH）でも奉仕活動を続けている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。

アフリカ便り

テインガテインガ絵画

タンザニアの新しい美術作品として静かなブームを巻き起こしつつあるのが『テインガテインガ絵画』運動である。その歴史はまだ50年足らずではあるが、絵画そのものの素材、手法など西欧の水彩画、油絵、または東洋の墨絵を主体とした絵画と全く異質なものだ。その素朴な表現法等は、まさにタンザニア独特のものと云える。『テインガテインガ』とはこの絵画手法を編み出した人物の名前だ。本人の名前は「エドワード・サイデ・テインガテインガ」である。まさにタンガニイカとザンバジルが合併してタンザニア共和国が誕生した1965年の前後に彼は独特の画法を創作し、これを広めた人物と云える。独特と云える理由を幾つか挙げてみよう。

先ず絵を描く画板だが、普通は西欧式の布地、東洋の紙に対し彼は建築用材、主に天井張りに使用する茶色がかった合板（ハードボード）を使用している。次は合板（ハードボード）の色、表面の粗い面に適する絵の具としてエナメルを採用している点だ。作品はタンザニアの動物、鳥類、花などを題材にしたものが多いが、その筆法が彼等の素直な眼と心で把え写実的というより若干抽象化され図案化されている。色彩が美しく、従来の油絵、水彩画、墨絵とは一風、異った美的感覚を表現している。最近、特に注目されるのは人物像の入ったテインガテインガ絵画が創作されてきたことだ。でもその人物画は、一人の人物の絵というより共同体（ウジャマ）の中の人物画が主体で、生活を題材にして描かれる人物が動的であることだ。漁師が小舟で漁をしている姿、村落の日常生活の姿を画面に素直に表現している。見る人は直ぐにタンザニア人の風俗、慣習をそのまま感じとることが出来る。『テインガテインガ氏』は1972年に逝去、以来その画法は近親に伝授された。弟子も各地より集まり主流派を形成し、現在はオマリ・アモンデを中心に多くの絵画を創作している。又、主流派とは別に「ムサグラ」と自ら称える別派はダルエスサラームの北に走るバガモヨ・ロード『ヴィレジ・ミュジアム』内で創作を続けている。過日、機会を得て訪ねてみたが、人物画の絵に専念するピーター、その弟子のジョンとジエレミアに会った。皆、若々しい。彼等は縦1メートル20、横1メートル40の大きな画板に「パラダイス」と云う題の大作に挑戦していた。描かれている多くの人物、動物、鳥、花、が理想郷（パラダイス）の平和と喜びを余すことなく表現していた。嬉しいことは、この絵画の紹介に対し日本の人が実に積極的に働かれたことだ。元タンザニア駐在大使、黒河内康氏、パイプオルガン奏者、児玉麻里女史、現在ダルエスサラーム大学でスワヒリ語の研究をなされる木村映子先生が『テインガテインガ絵画』の育成と紹介に大きな貢献をなされ、東京で『テインガテインガ絵画展』を開催、好評を得たことを忘れてはならない。ダルエスサラーム市内にある「ゲーテ・インステイチウト」でも昨年、6月、3週間に亘って『テインガテインガ絵画展』を開催したが、確実に世界に向けて関心が高まっている。

マサイ族の婦人達に囲まれて

テインガテインガ絵画

HOPE Bourgogne

アンジ・ル・デュック教会

文芸評論家
饗庭　孝男

あえば・たかお
1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。
著書に「石と光の思想」（勁草書房）、「自然・制度・想像力」「西欧と愛」「経験と超越」
「ヨーロッパとは何か」（小沢書店）、他多数。

クリュニー会とシトー会という、中世で汎ヨーロッパ的に拡がった修道会をもつブルゴーニュには、他の地方に較べて多い数百という教会がある。それだけに、ゆるやかな丘の間に点在する村々を巡り、気の向くままにそうした教会や修道会をたずねて歩くのは、愉しみもひとしほである。

たとえば、アンジ・ル・デュックという教会はブルゴーニュのもっとも南西にある。この地方の中心であるデイジョンからはおよそ188キロと遠隔の地で、オーヴェルニュと境を接している。ボーヌ、オータンからパレ・ル・モニアルを経て3時間あまり、寒村というほかはないところにある。

私が行ったのは早春の頃であった。平地の運河に面した壮大なクリュニー系のパレ・ル・モニアル修道会に較べると実につつましい。そこから30キロ、いくつもの丘を越えてゆく。車の音で出てくる村人たちは、見なれない私におどろき、犬も吠えてくる。丘の間にアルコンス河が流れ、ポプラの木立を映している。未だ芽を吹き出していない木々と丘の稜線の美しい影のなかに八角形の塔がそびえている。私は教会前へ出て並木の径を入り口へと歩いて行った。オータンのサン・マルタン修道院附属の小修道院（プリウレ）として建てられたのが9世紀のおわりである。その設立者はポワチエの聖職者、ユーグで完徳の人として亡くなったが、彼はクリュニー会の設立者、ベルノンの友人であった。そのため、このアンジ・ル・デュックへも巡礼がすすめられたのである。内陣の設立は1001年に行なわれた聖遺骨の移管にともなったものという。

教会は5つの梁間を持ち、身廊は11世紀の中頃に建てられた。それはブルゴーニュではじめての交叉穹隆（ヴート・ダレット）としてまとまった形をもつもので、この地方のロマネスク建築の師たちは、クリュニー修道院の交叉穹隆よりも、このアンジ・ル・デュックをしばしばその範としたのであった。

また八角形の塔と身廊は後に建てられたヴェズレーのサント・マドレーヌ教会の「モデル」となったと言われる。全体の印象はすこぶる調和のとれた形であり、気品にみちたものである。サント・マドレーヌ教会は1120年から1140年にかけて身廊をつくっている。したがってアンジ・ル・デュックの方が先行し、いくつかの建築上の示唆を後者に与えたことは間違いなく、ブルゴーニュのなかで南北に遥か隔てられているとはいえ、設立にかかわる人間関係と職人組合のつながりがこのような類似をうんだことも納得できるであろう。

私はこうしたブルゴーニュの寒村に、見事な均衡をもった教会があることに驚いた。身廊の仄暗い空間に入ってゆき、目が馴れてくるにしたがって、やや褐色の柱頭彫刻（シャピトー）もうかび上がってくる。関心を惹いたのは、中世の曲芸師の宙返りの像である。教会が「聖なる空間」であるとともに、世俗を迎え入れ、時にその玄関を含む空間で「神秘劇」や「殉難劇」を行ない、素人の役者に加えて吟遊詩人や曲芸師などがそれに参加したことを思えば不思議ではない。なめらかで、しなやかな肢体はリアリスティックであり、他の幻想動物とともに、ブルゴーニュ芸術の水準の高さを思わせる。オータンやヴェズレーの柱頭彫刻は、その精妙さにおいて他の地域を格段に引き離している。壁画は大部分が聖ユーグの業績を描いたものであるが、古い時代のため、識別がかなり難しい。

ふたたび外に出て半円型壁画（タンパン）を眺める。左に「東方の三博士の礼拝」、右に「原罪」、楯石には「最後の審判」で選ばれし人と地獄におちた人が分けられている。12世紀の黙示録時代を典型として示す彫刻であった。

私は一旦、村を出て、斜面を草原の方に下りて行った。夕焼が迫って空が淡くかがやいている。空気は冷たいが、どこか春の予感がみちている。振り返って教会を遠くから見上げると影絵のように稜線に木立とともに並んでいる空を背景に目にしみるような美しさだった。こんな村にしばらく止まりたいという望みが私の心をよぎった。

ところでパレ・ル・モニアル修道院教会に寄った時、私は南扉口に足をとどめた。民族的な組紐文様とも編籠文様ともとれる彫刻があり、しかも楯石の植物文様のうえに円形のメダル状の彫刻が8個平行し、その中心に舌を出した人間の顔と、左右に獅子文様があった。当時、洗練されたクリュニー系の教会にしては民俗的というより土俗的である。獅子文様は聖なる場所を守る獣の意味であろう。舌を出した像もプロヴァンス地方のモンマジュール修道院回廊にある。それはなにか呪術的な禁忌を示すものであろうか。舌は多義的な意味をもち、祭儀、言語にかかわるのであろう。中世の象徴体系はなかなかに解き難い。

Château de Chailly
シャトー・ドゥ・シャイイ

16世紀のルネッサンス様式のシャトーを改装したホテルです。現在、ゴルフ、リゾートクラブ会員として日仏友好会員を募集しております。
ルネッサンス・シャトーを軸として、何世代にも渡る日仏文化交流にご興味をお持ちの方はお問い合せ下さい。

問い合わせ先:㈱佐多商会　ブルゴーニュ事業部
TEL:03-3586-8873（東機貿ビル内）　担当:岩　沢